作者

梅崎春生

大正四（一九一五）年～昭和四十（一九六五）年。小説家。福岡県福岡市に生まれる。父建吉郎は陸軍士官学校出身の歩兵少佐。修猷館中学校から第五高等学校に進み、のちに小説家となる霜多正次らと同級だったが、落第して木下順二と同学年になる。昭和十一（一九三六）年、東京帝国大学国文科に進学し、十四（一九三九）年八月、「早稲田文学」に小説「風宴」を発表。十五（一九四〇）年、卒業。卒業後は東京市教育局教育研究所の雇員となる。十七（一九四二）年初頭に陸軍の召集をうけたが、軽い気管支炎を肺疾患と誤診され、即日帰郷した。十九（一九四四）年には海軍に召集され、佐世保相ノ浦海兵団に入団、暗号特技兵となる。二十（一九四五）年五月、下士官教育を受けて二等兵曹となり、敗戦まで九州の基地を転々とする。戦後、この海軍体験を踏まえ「桜島」（昭二十一）を発表し、戦争文学の優れた書き手として一躍注目されるに至った。その後、市民の平凡に見える日常に風刺や寓意を込める「市井事もの」と呼ばれる作品を多数発表するようになり、「ボロ家の春秋」（昭二十九）で第三十二回直木賞を受賞した。同じ年には「砂時計」で第二回新潮賞を受けた。

やがて梅崎は目まいなど心身の不調に悩みはじめ、不安を過量の飲酒で紛らわすようになる。昭和三十四（一九五九）年には、不安神経症状（うつ状態）により入院し、持続睡眠療法を受けた。退院後には長篇「狂い凧」（昭三十八）によって芸術選奨を受けた。昭和四十（一九六五）年七月十九日、以前から患っていた肝硬変の急激な悪化により、五十歳で死去。

文学活動

中学時代に改造社の日本現代文学全集や春陽堂の現代大衆文学全集などのいわゆる円本を耽読した梅崎は、高校に進学すると雑誌部の委員となり、校友会雑誌「龍南」に自作の詩を載せるようになる。すぐに小説も書くようになった。大学進学後の昭和十一（一九三六）年、二十一歳の時に同人雑誌「寄港地」を創刊、この号に小説「地図」を掲載した。これ以後、少しずつ小説を発表するようになっていく。

卒業後も同人雑誌「炎」を作るなどしたが、すぐに召集を受けた。戦争が終わると昭和二十（一九四五）年九月に上京し、友人宅で「桜島」を執筆した。浅見淵に見出され、雑誌「素直」の創刊号（昭二十一・九）に同作が掲載されると、梅崎はまたたく間に作家として名を知られるようになった。続いて「日の果て」（昭二十二）なども注目された梅崎は、当初「戦争もの」を得意とする作家と目されていたし、それらは実際に好評を得てもいた。しかし、その一方で同時期には「蜆」や「偽卵」（ともに昭二十二）などにおいて、敗戦直後の荒廃した風俗や人びとの心理を捉えた作品も書いていた。これらは市井のさりげない片隅の日常にシリアスな笑いをさぐる、いわゆる「市井事もの」と呼ばれる。

「市井事もの」の系列といえる作品には本文や「ボロ家の春秋」以外にも「空の下」（「新潮」昭二十六）、「Ｓの背中」（「群像」昭二十七）、「Ａ君の手紙」（「文学界」昭二十七）、「突堤にて」（「文学界」昭二十九）、「古呂おじさん」（昭三十）などがあり、いずれも寓意性、諷刺性が顕著な特徴となっている。梅崎はこれらにお

いて作中人物の内省的な態度を描き込む傾向が顕著で、そのことから「第三の新人の兄貴分」と評されることが多い。

不安神経症状の治療を終え「狂い凧」を発表した後には、「仮象」（昭三十八）、「朱色の天」（昭四十）などを経て、絶筆となった「幻化」と創作活動は続いた。「幻化」は精神科の病室を抜け出した主人公が九州、特に鹿児島と熊本を巡る長編小説である。それゆえ「戦争もの」と「市井事もの」とが止揚されていると見られる向きがあるが、一人称を用いた文体によって、現実の描写だけでなく記憶や幻覚なども取り混ぜて描き出された一つの世界として読まれるべき作品でもある。

作者を解くカギ

敗戦数年間の梅崎は「戦争もの」を書く一方で、社会の食糧難を背景として、ただ食べるために生きる人生の空虚さや滑稽さを描くことがしばしば見られた。エッセイ「エゴイズムに就て」（昭二十二）では、「生きて行くという事は既に、高度の狡智と他人に犠牲の上にのみ可能である」と述べ、「今の時代はエゴイズムの自覚と拡充から始まる」と宣言していた。こうした、食べることに関わるときに背徳も伴うエゴイズムの発露は、「市井事もの」に分類される「麵麭の話」（昭二十二）や「蜆」にも表れている。

日本社会が食糧難を解消した後に、梅崎は当初の題材を失ったかに見えたが、エゴイズムは日常生活を舞台に他者との関わりにおいて問題化されるテーマとして、「Sの背中」や「ボロ家の春秋」へと展開される。「高度の狡智と他人の犠牲」によって生きる点では戦後初期から通底している。そのテーマは、「狡智」を持たず「犠牲」になる側に視点人物を移し替えた作品とも言える「写真班」にも接続していく。

「写真班」の初出は「新潮」昭和三十一（一九五六）年二月であるが、この時の標題は「侵入者」であり、「写真班」と「植木屋」の二篇で構成されていた。「植木屋」は「参考」に一部を掲載した。両者はともにエゴイズムそのものとは距離を置き、世界と自己との関係をテーマにしているが、「植木屋」では視点人物と侵入者との会話がほとんどないまま家（庭）をいいように占拠される筋立てになっており、自己存在を無視されるという面では「写真班」よりもさらに深刻になっている。

出典

本文は「梅崎春生全集」３（沖積舎　昭和六十）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

参考文献

＊教師用

「戦後史の空間」（新潮文庫）磯田光一　新潮社　平十二

＊初刊は昭和五十八年。敗戦と占領という事態を経た住宅環境も含む日本の諸現象の変化が、人びとの何をいかに変容・変質させたかを問うもの。本書では梅崎春生「ボロ家の春秋」が取り上げられ、一九五〇年代の住宅事情と併せて考察がなされている。

「生きられた家―経験と象徴（新訂版）」多木浩二
青土社　平三十一

＊初刊は昭和五十一年。本書で「家」とは単に住居そのものを指すのではなく、そこに暮らす人間の経験や社会、文化のさまざまな要素が織り込まれた空間を意味している。そのような空間としての「家」をめぐる考察を通して、人間存在そのものについても思索が及んでいる。

「梅崎春生研究　戦争・偽者・戦後社会」高木伸幸
和泉書院　平三十

＊梅崎は従軍するより以前に発表した作品「微生」から遺作「幻化」に至るまで、一貫して社会を諷刺するスタイルを持っていたとし、主要作品を包括的に論じている。第四章第一節では、「写真班」を含む短編「侵入者」の執筆時期に梅崎が米軍基地問題に関心を示していたことを述べ、本作品を戦後の日米関係を諷刺したものと意味付けている。

＊生徒用

「水中都市・デンドロカカリヤ」（新潮文庫）安部公房
新潮社　昭四十八

＊「闖入者」所収。同作品は昭和二十六年に雑誌「新潮」に掲載された。昭和四十二年に発表された安部の戯曲「友達」の下敷きとなった作品で、突然おしかけてきた見知らぬ九人家族に家を占拠されてしまう男の物語である。他者、家、占拠など、本文とも共通するモチーフを多く含んでいる。

「城」（新潮文庫）フランツ・カフカ、前田敬作訳
新潮社　昭四十六

＊未完の長編小説。測量技師Kは、ウェストウェスト伯爵という人物の「城」に雇われ、その所在地である村にやってくる。しかし、仕事は与えられず、Kが「城」にたどり着くことも、そのときどきの状況や事件によって拒まれる。本文のように、他者から突きつけられる不条理にも見える要求や条件に翻弄される個人の姿が描かれている。

「ひとり空間の都市論」（ちくま新書）南後由和
筑摩書房　平三十

＊現代社会ではカプセルホテルやひとりカラオケなど、「ひとり」向けの商業施設が増えている。また、モバイル・メディアの普及は「ひとり」でいることの性質を日々変化させている。そうした人間に関わる空間の現状と特質を、豊富な事例を交えつつ解説している。